様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 4 月 1 日現在

研究種目： 若手研究（B）
研究期間： 2006～2008
課題番号： １８７２０１５９
研究課題名（和文）札幌農学校所属博物館における標本管理の実態からみた近代博物館史

研究課題名（英文）The history of modern museum understanding from the specimen managementactivities at the Sapporo Agricultural College Museum

研究代表者
加藤 克（KATOU MASARU）
北海道大学・北方生物圏フィールド科学センター・助教
研究者番号：50321956

研究成果の概要：
博物館の旧管理台帳、古記録類と所蔵鳥類標本の悉皆調査の結果により、明治期から昭和初期にかけての日本の大学博物館における標本管理・交換の実態が明らかとなった。この結果により、判断を保留されたり、誤って継承されてきた標本の採集情報を整備することが可能となり、動物学研究資源としての価値を高めることとなった。この成果は、博物館に所蔵される民族・歴史・絵画資料などへも還元され、資料利用が活性化することが期待される。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
２００６年度	400,000	0	400,000
２００７年度	600,000	0	600,000
２００８年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
総 計	1,200,000	60,000	1,260,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学 史学一般
キーワード：博物館 標本 歴史

１．研究開始当初の背景

札幌農学校所属博物館(現在北海道大学植物園･博物館)は明治 10 年に設立された開拓使の札幌博物場を母体とする博物館であり、震災･戦災に巻き込まれた本州の博物館とは異なり、明治以降の学術標本･歴史資料を現在も有するという点で、国内有数の機関である。その歴史の深さゆえに第一回内国勧業博覧会や万国博覧会に出品された物品など、歴史的に価値のある資料も多数所蔵されている。明治 17 年の札幌農学校移管後は、動物学標本を中心とする収集へと役割が変更されたが、田中芳男や東京理科大学、海外の大きな博物館との標本交換も盛んで、近代博物館の中で極めて異彩を放つ大学博物館であった。しかし、動物学者が博物館の管理責任者であった時代が長く、標本･資料の歴史的価値という側面が重視されてこなかったため、資料が有する価値は失われ、必ずしも適切に評価されていない。これまで、申請者は博物館所蔵民族資料や絵画資料を題材に管理ラベルの特徴や記載情報を精査すること

で、収集・受け入れ年代の把握が可能となること、古い台帳や記録類と照合することで、継承されなかった資料情報を追加することを明らかにしてきたが、その中で、個別の資料の価値の検討だけではなく、資料総体の管理の実態の解明こそが資料の失われた価値を復元するために必要な作業であると判断するに至った。

鳥類標本を主たる対象とした動機は、北大植物園・博物館において、鳥類標本が常に収集・管理の中心的存在であり、所蔵資料の 2 割近くを占めていることから、利用できる情報が多いこと、各年代において外部の機関との標本交換を実施してきたことが確認されていることで、博物館の活動の様子をより把握できるものと考えたためである。また、研究利用の希望が多く、所蔵標本目録の公開が急務であり、信頼される情報提供の体制を早急に整える必要があるという背景もある。

また、日本の博物館史において大きな存在である北大植物園・博物館の歴史は、これまで制度的な経緯のみが明らかにされているのみで、詳細な内部情報の検討が行われてこなかった。博物館に残された古記録、標本ラベルは、博物館内部での活動を示す重要な資料であり、これらを再評価する必要があると考えたものである。

２．研究の目的

本研究の目的は、北大植物園・博物館の標本管理に関わる資料・史料と、標本そのものについて調査・検討を行い、管理にあたる職員の活動という視点から博物館の歴史を描き直すことにある。標本管理の方針・方法の変遷、外部博物館との標本交換など、日本の博物館黎明期から存続してきた博物館の運営の実態を明らかとし、日本の博物館史の新たな側面を見出す。

この目的を達成するために、各年代の標本管理台帳の情報をデータベース化し、標本台帳相互の関係把握、情報の引き継ぎの精度などを明らかにする。この情報と、混乱している可能性のある所蔵鳥類標本とを照合し、欠落した情報、誤って継承された情報について追記・修正を行い、標本の学術的価値を向上させる。この調査にあたっては、全標本を撮影し、標本目録・データベース化の基礎とすることを付随目的とする。

北大植物園・博物館において、鳥類標本は所蔵資料の 2 割を占める。鳥類標本の管理体制の変遷を把握から得られた情報を、考古・民族・歴史など別分野の資料にフィードバックし、新たな知見を得る。

人文資料・生物学資料などの分野を横断した「標本史」・「標本管理史」という新たな研究の視点を構築することも本研究の目的の一つである。

３．研究の方法

(1)北海道大学、東京国立博物館、北海道立文書館他に所蔵されている古記録・文書類から、各年代の所蔵標本状況調査、標本の購入、移動などの歴史的情報を整理する。

(2)北大植物園・博物館所蔵標本管理台帳、標本カード類をデータベース化し、各年代における標本管理の実態を把握する。同時に各台帳類の利用年代を明らかとし、標本情報の混乱の変遷、原因について解明する。

(3)北大植物園・博物館所蔵鳥類標本と付属する標本ラベルを撮影し、情報をデータベース化する。これらの情報を(2)で構築したデータベースとリンクさせ、各年代の標本管理と現存標本とを関連付ける。照合結果により、現時点での標本情報の誤りの修正、未確定情報の確定作業を行う。

(4)付属ラベルの様式を元に、所蔵鳥類標本をグループ化し、特定ラベルの付属が、いずれの年代の管理標本であるかを示す。また、特定の目的で収集された標本群であることを示す。これにより、文字化されていない情報をも博物館標本の情報として提示する。

(5)(1)で確認した外部博物館との標本交換の経緯を踏まえ、当該博物館の所蔵標本を調査し、旧台帳に記載のある標本のいずれが交換により現在所蔵していないものであるのかを明らかとする。あわせて、当該標本のラベルの付属状況を確認し、博物館におけるラベルの利用年代を証拠づける。交換先は、①山階鳥類研究所および学習院中・高等科(帝国大学理科大学との交換標本)、②国立科学博物館、③アメリカ自然史博物館(ニューヨーク)、④ストックホルム自然史博物館などである。

(6)北大植物園・博物館所蔵鳥類標本を利用して発表された論文、著書などのうち、現在の標本管理体制となった 1961 年以前に発表されたものを収集し、現存標本、交換で外部博物館等に送られた標本とを照合する。引用記録について、標本管理データベースに登録するとともに、博物館側からの誤った情報が利用されていないかについて確認作業を行う。

(7)標本管理体制の変遷、標本ラベルの変化などが、博物館や設置者である札幌農学校、北海道大学、あるいは日本の博物館が置かれていた状況との関連の有無について検証し、変化の意味・意義について検証する。

(8)北大植物園・博物館の歴史を設置者の視点からではなく、内部の管理業務に携わった職員の活動という視点から描き直し、日本の博物館史、学術史の再検討・再構築の礎とする。

４．研究成果

(1)史料調査による成果

①博物館が札幌農学校所属となる直前に所管していた内務省博物館との資料交換の実態を解明し、博物館旧蔵の民族資料・考古資料が現在東京国立博物館に所蔵されていること、北大植物園・博物館に所蔵されている勧業関係の資料が、明治 16 年に内務省博物館から送られたものであることが明らかとなった。これらの資料には、購入資料であることを示すラベルが付属しており、内国勧業博覧会などで内務省博物館が購入したものである可能性が示唆された。この点については今後の課題であるが、日本の近代化にあたって内国勧業博覧会が果たした役割は大きなものであり、その実態を示す重要な資料となりうるものと考えられる。

また、これらの勧業資料の一部が、札幌農学校所属となってから返却されていたことも明らかとなり、古記録・旧台帳記載と現存資料間での情報整理の重要性も確認された。

②札幌農学校所属博物館と同様に、開拓使によって設立された東京仮博物場が 1881 年に廃止された際に所蔵標本・資料が札幌、函館、内務省博物館に分散されたことはこれまでも知られていたが、その詳細については部分的にしか知られていなかった。本研究により、絵画資料などは札幌の博物館に、鳥類標本、岩石標本などは札幌農学校に、民族資料は函館の博物館に、水産資料など勧業資料と一部の動物標本、民族資料は内務省の博物館に送付されていたことが明らかとなった。

(2)古記録類による札幌農学校所属博物館の所蔵鳥類標本の情報について

①1882 年時点での標本状況詳細
②1884 年時点での標本状況詳細
③1884 年の標本増加数
④1885 年末の標本総数および増加数
⑤1885 年の博物館日誌による標本採集記録
⑥1887 年の博物館職員による利尻・礼文標本採集記録詳細
⑦1887 年の農学校研究生による採集記録詳細
⑧1887 年の標本総数および増加数
⑨1894 年の標本寄贈受入記録
⑩1895 年の函館博物場標本借用依頼
⑪1895 年の博物館職員による捕獲計画
⑫1900-35 年の物品監守証書による購入・受け入れ標本の実態

などの史料を確認し、台帳類の検討の基礎資料とした。

(3)博物館旧台帳のデータベース化と利用時期の解明

①1886-1912 年の標本受け入れ簿
②1890 年代に①の混乱を解消するために利用された標本カード(1910 年前後まで①と併用)
③1902 年に、北海道産鳥類標本の論文執筆のため作成した所蔵標本目録
④1930 年代に当該時点の所蔵標本を把握するために作成した標本カード
⑤1945 年以降 50 年ごろまでに利用していた標本台帳

これらの台帳・カード類をデータベース化し、各年代の所蔵標本の詳細について把握し、標本管理の実態について明らかとした。

(4)博物館所蔵鳥類標本の悉皆調査と管理台帳との照合

1 万点を超す北大植物園・博物館所蔵鳥類標本と付属する標本ラベルすべてを撮影し、記載情報をラベルごとに分類して、データベース化した。計測値や収集者など、現行の標本台帳に記載されていない情報を追記し、情報の充実を図った。

ラベルに記載されている管理番号を(3)の各台帳と照合し、旧台帳・カード類に記載されている標本との対応関係を明らかとした。旧台帳の利用年代の前後関係などを考慮に入れ、標本情報の混乱について修正を行った。採集年次が留保されていたものを含め、約 1,000 点の標本について採集情報の追記、修正が可能となり、学術標本としての価値を高める結果となった。

また、標本自体に採集年次が記載されていないものであっても、旧台帳との対応関係の結果から、明治期受け入れ標本であることなどを把握することが可能となり、標本価値を向上させた。

(5)標本ラベルの利用年代と、台帳以外の管理番号の意味について

標本付属ラベルを種類ごとに分類してデータベース化したことにより、各ラベルの利用年代を把握することが可能となった。所管機関が札幌農学校、東北帝国大学農科大学、北海道帝国大学など、名称を変化させてきたことに伴い、利用ラベルが変化していることなどが明らかとなった。

また、ラベルの付属状況から、特定の調査目的(樺太動物調査など)で収集されたコレクションを選別することが可能となり、調査報告書と対応させることで、標本情報を追記することが可能となった。

このほか、旧台帳類の管理番号とは対応しないラベルの記載番号についても、ラベルご

と、記載場所ごとに抽出して検討を行ったことで、特定期間の管理体制を把握することが可能となった。これにより、旧台帳による収集年代の修正が不可能な標本についても、情報の収集が可能となった。

(6)標本交換の実態解明

明治期に行われた帝国大学理科大学との標本交換が一度ではなく、複数回行われていたこと、札幌農学校から送られた標本は、現在山階鳥類研究所(一部学習院)に所蔵されており、明治期の台帳と照合することができるものであることを確認した。

20 世紀初頭に行われたアメリカ自然史博物館との標本交換については、日本に送られた標本についてはすでに調査を行っていたが、アメリカに送られた標本を一部調査した。

1930 年代にストックホルム自然史博物館との間で行われた標本交換について新たに確認した。スウェーデンに送られた標本の実見はかなわなかったが写真を入手し、旧台帳との照合を行った。

このほか、シンガポールなどから送られた標本も標本悉皆調査から確認されたことから、今後調査を継続する予定である。

外部に送られた標本は、北大植物園・博物館における各年代の管理方法をそのまま保存しているため、(3)～(5)の結果を裏付けることが可能となった。

(7)標本の引用情報の再検討

現行の管理体制が開始された 1961 年以前に、北大植物園・博物館所蔵標本を利用した研究論文・著書などを博捜し、現存標本との照合作業を行った。台帳に引用情報を追記するほか、誤って引用された情報についても今後公開するデータベース等で注意を喚起する予定である。

(8)標本管理史全体の考察

上記の成果から、北大植物園・博物館における鳥類標本の管理史を解明することができた。標本自体の情報のみならず、台帳の記載基準についても検討を行い、依拠する分類体系などの変遷など、標本管理者の活動、考えといった視点からの歴史を描くこととなった。

これらの歴史が日本の博物館史の中でどのように位置づけられるかについては、同年代に機能していた博物館が少数であることや、同じような視点からの調査がなされていないことから、今後の課題とせざるを得なかったが、博物館史の新たな側面を提起することで、研究の発展に寄与するものと考えている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

①加藤克, 北海道大学植物園所蔵アイヌ民族資料について ： 歴史的背景を中心に, 北大植物園研究紀要, 8 号, 35-91, 2008, 査読有

〔その他〕（計２件）

①北海道大学総合博物館企画展示「アイヌ文化展 テエタシンリッテクルコチ（先人の手あと)」に本研究成果の一部を反映, 2009

②「北大植物園・博物館所蔵鳥類標本の情報混乱とその整理調査について」（山階鳥類研究所所内研究会にて報告), 2008

６．研究組織

(1)研究代表者

加藤　克（KATOU　MASARU）
北海道大学・北方生物圏フィールド科学センター・助教
研究者番号：50321956